TS（トータル・サティスファクション）を目指して　MI9

「意思決定を相手に委ねる」対話を

校長室担当より

　すでにお伝えしたことですが、一般的な正義やルールを振りかざして、「あなたはこうあるべきだ」とか逆に「こうであるべきではない」という「べき像」を作り上げ、そこからずれていることを指摘ばかりしても、逆にずれないようにいくら煽てても、こどもは自分で考えて行動できる大人にはなれません。その「べき像」へこどもがシフトしていくかどうかは、周囲の大人がことさら良い悪いを判定することではなく、こどもが一人一人が考えて決めること。そのためには「対話」をより深化させた形で行っていく支援が必要です。

　「ドラゴン桜」等の編集を担当し、クリエイターのエージェント会社である「コルク」（社名）の代表取締役社長を務めておられる佐渡島庸平さんのお話です。息子さんが学校に行かない時があり、家でダラダラ過ごしている様子を見かねて、奥様は「学校に行ってないんだから、今日のゲームの時間はなしよ。」と言われたこともあったそうです。親としての願いもあり、そんな気持ちになることは私もよく理解できます。ご主人の佐渡島さんもどうしたものかと思案されていましたが、ある時に２日続けて学校休んだ息子さんに、「明日も行かないつもりなの？」と佐渡島さんが訊くと、「明日は行くつもり」と答えたそうです。ここでご主人は、「学校に行くことが偉いとは考えてなくて、自分に嫌なことがあって破裂してしまった感情をちゃんと立て直したところが偉いと私は思う。大人でもできない人もいる。尊敬するよ。」と。

　素晴らしい声掛けですね。対話として、まず意思決定を相手に委ねていることが大きい。「行ったら？」「行くべきだよ」では、どうしてもどこかに「負けた気がする」感が相手に出てしまいます。そして次の言葉が「私はこう思う」というアイ・メッセージになっているということと、単なる「偉いね」「すごいね」という言葉で終わらず、具体的な価値観が共有できる内容であるということです。つまり自分を主体としていて、世の中の一般的な常識や善悪基準で話しているのではないというところが大きなポイントです。少し時間がかかるかもしれませんが、相手に意思決定を任せること、アイ・メッセージで具体的に自身の価値観を伝え、考えさせる対話を意識していきましょう。（令和７年５月２８日）